

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察予報について（送付）

このことについて、令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第2号を発表しましたので送付します。

## 予 報

令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第2号（5月予報）

## I 主要な病虫害の発生予想概要

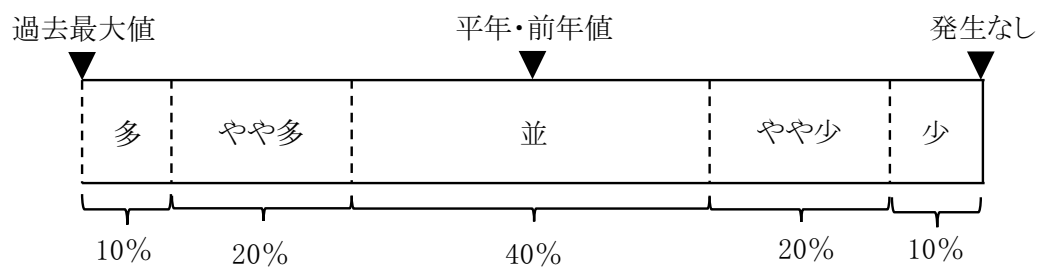
作物	病虫害名	4月の発生状況		5月の発生予想	
		平年比		平年比	前年比
水稲	いもち病 (葉いもち)	早期	—	早期	並
	イネミズゾウムシ	早期	—	早期	並
麦	赤かび病		—		多
いぐさ	イグサシンムシガ		並		並
茶	カンザワハダニ		やや少		やや少
	クワシロ カイガラムシ		少		少
	チャノコカクモン ハマキ		やや少		やや少
	チャハマキ		やや多		やや多
	チャノホソガ		やや少		やや少
かんきつ	灰色かび病		—		並
	ミカンハダニ		やや少		やや少
なし	黒星病		並		並
					やや多

作物	病害虫名	4月の発生状況		5月の発生予想		
		平年比		平年比	前年比	
トマト	黄化葉巻病	冬春作	並	冬春作	並	やや少
なす	すすかび病	冬春作	並	冬春作	並	やや多
きゅうり	うどんこ病	冬春作	並	冬春作	並	並
	べと病	冬春作	並	冬春作	並	並
うり科野菜	退緑黄化病 すいか退緑えそ病	冬春作	並	冬春作	並	並
いちご	ハダニ類	本ぼ	多	育苗ほ	多	多
果菜類全般	灰色かび病	冬春作	並	冬春作	並	やや多
	コナジラミ類	冬春作	やや多	冬春作	やや多	やや多
	アザミウマ類 (いちご除く)	冬春作	並	冬春作	やや多	並

## II その他の病害虫の発生予想概要

部門	5月の発生予想	(作物) 病害虫名
	平年比	
果樹	やや多	(なし) 赤星病
	並	(かんきつ) そうか病、かいよう病、アブラムシ類 (なし) アブラムシ類
野菜類	並	(うり科野菜) つる枯病、菌核病 (野菜類全般) アブラムシ類

※ 発生程度は平年（過去10年間の平均値）・前年と比較し多～少の5段階で示している。



### Ⅲ 5月の主要な病害虫の防除対策と留意点

#### 水稻

##### 1) 共通事項

- ・今後、播種期を迎える作型では、比重選と種子消毒を徹底する。
- ・育苗中は異常な高温・多湿を避け、衛生的な環境で健全な苗づくりに努める。
- ・移植後の補植用苗は病害虫の発生源となるため、不要になり次第処分する。

##### 2) 病害

- ・いもち病は、病害虫防除所のホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に葉いもち感染好適日の判定結果(BLASTAM)を掲載しているため、これを参考には場を観察し、発生初期に防除を行う。

##### 3) 虫害

- ・根の発育が不良な水田では、イネミズゾウムシの幼虫による被害が大きくなる。周辺の雑草地から成虫が侵入するので、畦畔付近の生育をよく観察し、成虫が10株当たり5頭以上発生した場合は、水面施用剤により防除する。
- ・スクミリンゴガイは、水温が15℃を超えると活動を開始する。前年に発生した水田では、水深1cm以下の浅水管理に努める。薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤(メタアルデヒド等)と食害防止する剤(カルタップ等)があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- ・各種トラップへの海外飛来性害虫の誘殺状況を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考には場を見回り、早期発見、早期防除に努める。

#### 麦

##### 1) 病害

- ・赤かび病の発生が平年より多いと予想される(令和8年4月22日付け病害虫発生予察注意報第1号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/308856.pdf>))。収穫が遅れると、赤かび病菌が産生するかび毒(DON)の含有濃度が高くなる傾向があるため、適期に収穫する。収穫した麦は可能な限り適切な水分まで速やかに乾燥させる。

#### いぐさ

##### 1) 虫害

- ・イグサシンムシガの越冬世代の発蛾最盛日から予測される第1世代の発蛾最盛日は、5月29日である(4月23日時点)。適期(発蛾最盛日及びその1~2週間の範囲)を逃さないように2回程度の防除を広域で行う。病害虫防除所のホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に発蛾最盛日予測を掲載しているため、最新の予測日を確認する。

## 茶

### 1) 共通事項

- ・一番茶摘採後は、複数の病害虫を対象とした薬剤散布の機会が増える。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

### 2) 虫害

- ・チャノキイロアザミウマ及びクワシロカイガラムシの有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期や、ハマキムシ類、チャノホソガのフェロモントラップによる誘殺消長を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
- ・ハマキムシ類の防除適期は、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期である。一番茶摘採と重なるときは、摘採後速やかに防除を行う。
- ・チャノホソガは、三角葉巻をつくる前の若齢期や幼芽期（新芽が5mm以内）に防除する。
- ・カンザワハダニは一番茶摘採後から発生が多くなる。多発してからの防除では十分な効果が得られないので、園地をよく観察し、低密度時から薬剤防除を行う。

## 果樹

### 1) 共通事項

- ・各種トラップにおける果樹カメムシ類の誘殺状況及びチャノキイロアザミウマ、ナシヒメシンクイ、ナシマルカイガラムシの積算温度による発生予測を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考に園地を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- ・開花期の薬剤散布では、ミツバチ等の受粉昆虫に影響が少ない薬剤を選択する。

### 2) 病害

- ・かんきつでは、開花期から落弁期に降雨が続くと灰色かび病の発生が多くなるので、満開期及び落弁期（5月上旬～中旬）の防除を徹底する。花卉から感染しやすいので、木の枝をゆする等して花卉を落とす。そうか病とかいよう病は、春葉で発生した病斑が果実への伝染源になるため、春葉の予防を徹底する。
- ・なしでは、黒星病の発病葉と発病果実が周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出して処分する。防除は保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。開花期までの防除が不十分な園では、降雨のたびに感染が拡大するため、晴れ間を見て防除を行う。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。薬剤の年間使用回数はQoI系（FRACコード：11）、DMI系（FRACコード：3）及びSDHI系（FRACコード：7）がそれぞれの系統で2回、DHODHI剤（FRACコード：52）は1回を基本と使用する。

### 3) 虫害

- ・定期的に園を観察し、ハダニ類が多発する前に殺ダニ剤による防除を行う。マシン油乳剤を散布していないかんきつ園では、新梢葉でのミカンハダニの発生に注意し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達したら薬剤防除を行う。ナシのハダニ類では、雌成虫の寄生葉率が20%以上または1葉当たり1～2頭に達したら薬剤防除を行う。
- ・チャバネアオカメムシの越冬量が平年より多い（令和8年2月10日付け病害虫発生予察技術情報第10号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/301622.pdf>))。果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。

## 野菜

### 1) 共通事項

- ・チョウ目害虫の発生状況については、病虫害防除所ホームページの「調査データ」 (<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>) に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) 病害

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
- ・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病には罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。

### 3) 虫害

- ・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
- ・微小害虫は気温の上昇とともに活動が活発になるため、「増やさない」対策を徹底する。本対策は微小害虫が媒介するウイルス病に対しても有効である。冬春果菜類の栽培地域におけるタバココナジラミ防除については、令和7年11月6日付け病虫害発生予察技術情報第9号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/294706.pdf>) を参照する。
- ・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫の密度を抑制し拡散を防ぐため、栽培終了2週間前まで本虫に登録のある薬剤防除を行う。対策の詳細や薬剤の選定については、令和8年4月1日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について」 (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html>) を参考にする。
- ・イチゴでは、殺ダニ剤を散布する際は、令和7年5月1日付け発生予察技術情報第1号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf>) を参考にして選定する。また、ハダニ類の本ほからの持ち込みを防ぐため、育苗ほの管理作業は最初に行う。
- ・栽培終了後の「出さない対策」を徹底する。微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫を完全に死滅させる。施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

## F A X版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。  
<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

#### IV 主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

- ※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。
- ※ 根拠末尾の（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう1か月（4月25日～5月24日）の気象予報 福岡管区気象台発表

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10%	40%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	40%	30%	30%

#### 水稲

##### 1) 葉いもち

(1) 予想発生量 早期：平年並

##### (2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査（6か所）では、発病が認められず（平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（2地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年並（±）の予想である。

##### 2) イネミズゾウムシ

(1) 予想発生量 早期：平年並

##### (2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査（6か所）では、食害度1.0（平年0.1）、寄生頭数0.2頭/25株（平年0.2頭/25株）と平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（2地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

#### 麦

##### 1) 赤かび病

(1) 予想発生量 平年比多

##### (2) 根拠

- ◎ 4月1日以降に観測された多発条件出現日が平年より多かった（+）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年並（±）の予想である。

赤かび病の多発条件出現日数(4月1日～26日現在)

アメダス観測地点	本年	前年	平年	平年比
菊池市	5日	5日	3.2日	1.8日多い
熊本市	10日	6日	3.7日	6.3日多い
人吉市	7日	6日	2.8日	4.2日多い

平年は過去10年間の平均

## いぐさ

### 1) イグサシンムシガ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 八代地域で3月25日に実施した調査では、越冬世代の幼虫及び蛹の寄生密度は0.7頭/10m<sup>2</sup> (平年2.8頭/10m<sup>2</sup>) と平年比少であった(－)。
- ◎ 防除員報告(2地域)によると、4月の発生は平年並であった(±)。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。

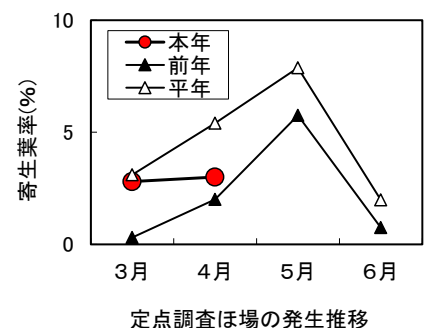
## 茶

### 1) カンザワハダニ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査(8か所)では、寄生葉率3.0%(平年5.4%)と平年比やや少の発生であった(－)。
- ◎ 御船町(茶業研究所)の4月第2半旬の定点調査では、寄生葉が認められず(寄生葉率平年7.0%)、平年比やや少の発生であった(－)。
- 防除員報告(5地域)によると、4月の発生は平年比やや多～やや少であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。

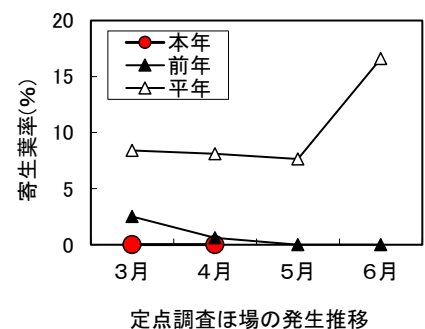


### 2) クワシロカイガラムシ

(1) 予想発生量 平年比少

(2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査(8か所)では、寄生が認められず(寄生株率平年8.1%)、平年比少の発生であった(－)。
- 防除員報告(5地域)によると、4月の発生は平年比やや多～やや少であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。

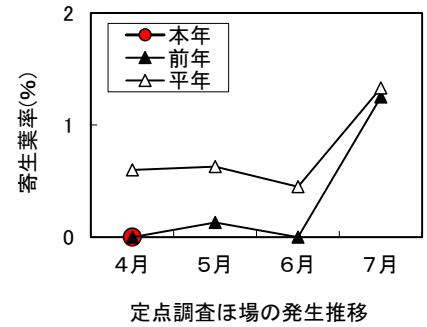


### 3) チャノコカクモンハマキ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査(8か所)では、被害葉が認められず(被害葉数平年0.6葉/m<sup>2</sup>)、平年比やや少の発生であった(-)。
- ◎ 御船町(茶業研究所)の4月第1~2半旬のフェロモントラップ誘殺数は1頭(平年10頭)と平年比やや少の発生であった(-)。
- 防除員報告(5地域)によると、4月の発生は平年比やや多~やや少であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。

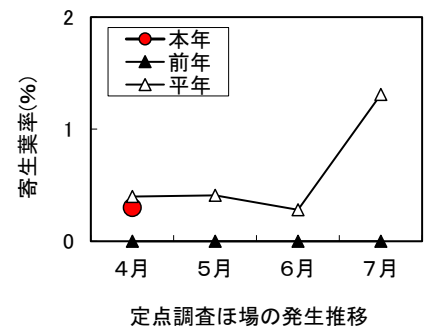


### 4) チャハマキ

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- 4月の定点調査(8か所)では、被害葉数0.3葉/m<sup>2</sup>(平年0.4葉/m<sup>2</sup>)と平年並の発生であった(±)。
- ◎ 御船町(茶業研究所)の4月第1~2半旬のフェロモントラップ誘殺数は37頭(平年13頭)と平年比やや多の発生であった(+)。
- 防除員報告(5地域)によると、4月の発生は平年比やや多~やや少であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。



### 5) チャノホソガ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査(8か所)では、被害葉が認められず(平年0.3葉/m<sup>2</sup>)と平年比やや少の発生であった(-)。
- ◎ 御船町(茶業研究所)の4月第1~2半旬のフェロモントラップ誘殺数は7頭(平年31頭)と平年比やや少の発生であった(-)。
- 防除員報告(5地域)によると、4月の発生は平年比やや多~やや少であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。



## かんきつ

### 1) 灰色かび病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

◎ 向こう1か月の降水量は平年並の予想である(±)。

### 2) ミカンハダニ

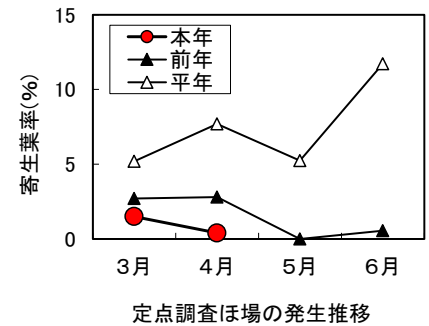
(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

◎ 4月の定点調査(22か所)では、雌成虫の寄生葉率0.4%(平年7.7%)、寄生頭数0.0頭/10葉(平年1.8頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(-)。

○ 防除員報告(7地域)によると、4月の発生は平年比やや多~並であった(±)。

○ 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。



## なし

### 1) 黒星病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

◎ 4月の定点調査(6か所)では、発病が認められず(平年発病葉率0.0%)、平年並の発生であった(±)。

◎ 向こう1か月の気温は平年より高く(-)、降水量は平年並(±)の予想である。

## トマト

### 1) 黄化葉巻病

(1) 予想発生量 冬春作: 平年並

(2) 根拠

◎ 4月の定点調査(7か所)では、発病株率2.6%(平年2.4%)と平年並の発生であった(±)。

◎ 防除員報告(3地域)によると、4月の発生は平年比やや多~並であった(±)。

○ 向こう1か月の気温は平年より高い予想であり、媒介虫であるコナジラミ類の発生に好適な条件となる(+)

## なす

### 1) すすかび病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 4月の定点調査（5か所）では、発病株率41.6%（平年34.8%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- ◎ 防除員報告（4地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並の予想である（±）。

## きゅうり

### 1) うどんこ病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査（5か所）では、発病株率17.6%（平年18.2%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並の予想である（±）。

### 2) ベと病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 4月の定点調査（5か所）では、発病株率25.6%（平年30.2%）と平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量はほぼ平年並の予想である（±）。

## うり科野菜

### 1) 退緑黄化病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 4月の冬春きゅうりの定点調査（5か所）では、発病株率16.4%（平年11.9%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- ◎ 防除員報告（7地域）によると、4月の発生は平年並～少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想であり、媒介虫であるコナジラミ類の発生に好適な条件となる（+）。

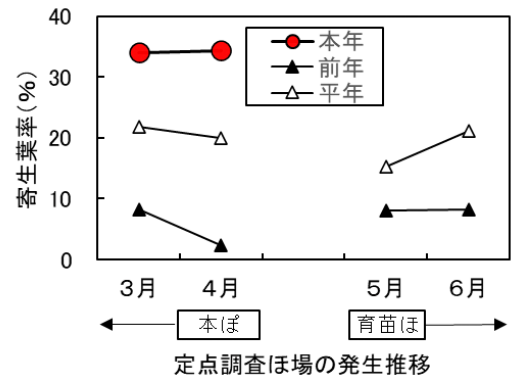
## いちご

### 1) ハダニ類

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年比多

#### (2) 根拠

- ◎ 4月の定点調査（6か所）では、寄生葉率34.3%（平年23.7%）と平年比多の発生であった（+）。
- 防除員報告（3地域）によると、4月の発生は平年比やや少～やや多であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。



## 果菜類全般

### 1) 灰色かび病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

#### (2) 根拠

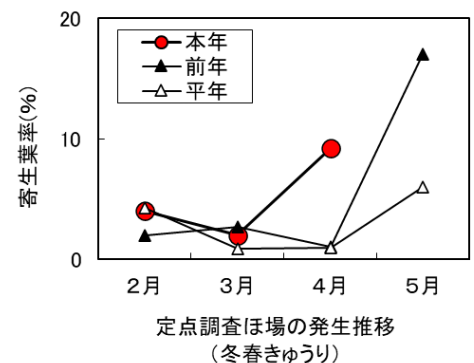
- 4月の冬春トマトの定点調査（7か所）では発病株率2.0%（平年12.2%）と平年比少、冬春なすの定点調査（5か所）では発病株率4.0%（平年3.4%）と平年並、冬春きゅうりの定点調査（5か所）では発病株は確認されず（平年8.7%）平年比少、いちごの定点調査（6か所）では発病株は確認されず（平年0.2%）平年並の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（12地域）によると、4月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並の予想である（±）。

### 2) コナジラミ類

(1) 予想発生量 冬春作：平年比やや多

#### (2) 根拠

- ◎ 4月の冬春トマトの定点調査（7か所）では寄生葉率1.4%（平年1.8%）と平年並、冬春なすの定点調査（5か所）では寄生葉率9.6%（平年9.1%）と平年並、冬春きゅうりの定点調査（6か所）では寄生葉率2.0%（平年0.9%）と平年比やや多の発生であった（±）。
- 防除員報告（21地域）によると、4月の発生は平年比やや多～少であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

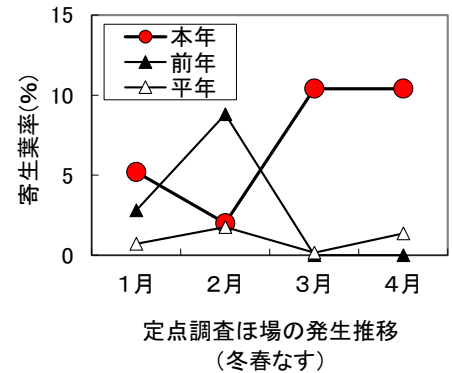


### 3) アザミウマ類 (いちご除く)

(1) 予想発生量 冬春作：平年比やや多

(2) 根拠

- 4月の冬春なすの定点調査(5か所)では寄生葉率10.4%(平年1.4%)と平年比やや多、冬春きゅうりの定点調査(5か所)では寄生葉率1.2%(平年5.1%)と平年比少の発生であった(±)。
- 防除員報告(6地域)によると、4月の発生は平年並~少であった(-)。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である(+)。



## V 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

## VI その他

本情報は病虫害防除所のホームページにも掲載しています。

病虫害発生予察情報に関する詳細な内容等については、病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490)にお問合せください。

ホームページを  
チェックだモン!



©2010 熊本県くまモン